被災の大きさに驚愕　～宮古市を訪ねて～

奥　住　公　夫

6月7、8日、私は「肉まん隊」ボランティアとして岩手県宮古市へ行ってきた。

これは、埼玉県松伏町や他の工場で麺や肉まんなどを製造し全国規模の市場を有する菅野製麺所が「被災者の皆さんに自社製品の肉まんを食べて元気を出してもらいたい」との願いから始めた支援事業である。勿論、菅野社長の発想によるもので、被災地の復興の足がかりになってほしいという法人としての地道な社会貢献である。

4月よりすでに埼玉県内各地の避難所やいわき市、二本松市、石巻市、そして今回の宮古市など10カ所を訪れて、目標の「肉まん3万個」を達成した。

今回の目的地は宮古市田老地区。社長と2人の社員がトラックに1000個の生の肉まんを積み、そしてその手伝いボランティア我々5人はもう一台の車に乗り込み現地へ向かった。7日は盛岡に一泊し、翌8日早朝宮古へ向かった。

現地には、予定より40分ほど遅れて到着。すでに「肉まん隊」の情報が地域に流れていて十数人が会場の田老福祉センターに集まっていた。あいさつを交わして、すぐ準備に取りかかった。5段重ねのせいろう（蒸し器）を2カ所に設置し、一度に250個を蒸かす。15分で蒸し終わると、小袋に一個ずつ入れて配るという段取り。

気がつくと、50人ほどに増えており、2列に並んで静かに待っている。お孫さんを連れている人も。皆元気そうだ。話すことばも声高だ。漁業の会話も聞こえてきた。漁師たちのようだ。そういえば長年太陽の下で働いていたので顔は真っ黒だ。

会話の端々に地震や津波がどんなに怖かったかを窺い知ることができたが、返す言葉がすぐには出てこなかった。

肉まんは一人につき4個配ることにした。ふ～ふ～しながらその場で食べる人もいて、「うまい、うまい！」と。一人で4人分20個という人もいて、あっという間に1回目の250個がなくなった。すぐに2回目の準備。

2回目の肉まんも人気上々、数分で“完売”。中には、待ち切れず、「生のままほしい」という申し出もあった。今は電気も使えるので、家で蒸して食べるとのことであった。

ところで、最後は足りなくなって一人4個ずつ配れず、何人かに一人1個で我慢してもらい、持参した1000個をすべて配り終えた。

少しして、持ち帰って食べた人が「とてもおいしかった」とわざわざお礼を言いにきてくれた。また、「さっきはどうも・・・」と言いながら漁師と思われる人が自転車で通り過ぎた。

個々人の震災の被災状況は分からないが、敢えて顔にも態度にも出さないでいる様子である。気丈そうに見えても内心は不安の日々であろうと思う。すべて東北人気質だ。私たちは「肉まん」を通して、被災地の皆さんと心の連携・連帯、あるいは絆を培えたらと願いつつ訪問したのであったが・・・。

ここ田老地区は、リアス式海岸の小さく切り込んだ湾の奥の町で、4000人余居住している。明治･昭和の時代に大きな津波により多くの人が犠牲になった。この苦い教訓から、1979年（昭和54年)、高さ10m、長さ2433mの防潮堤を作った。「万里の長城に囲まれた町」とも言われていたが、今次津波はこれをも破壊し住宅を襲った。

しかし、日頃の訓練が生かされて死者は他地区に比べると僅少であったものの、避難者は今でも2400人余に及んでいる。大きな瓦礫の片付けはかなり進んでいるようだけど、一面荒野と化した住宅地はどうなるのか、どうすべきか、また、船を流された漁師たちは復活できるのか。被災現地を見て被災の余りもの大きさに驚愕しながら宮古を後にした。

社長が掲げた「肉まん隊」の所期の目的はかなり達成されたと思う。物心両面からの支援として実に立派であり敬意を表したい。

私自身、前回の埼玉県内避難所での「肉まん隊」と合わせて2回参加させてもらったが被災県岩手出身の一人として、この現実にきちんと向かい合い、被災者の苦しみを分かち合い、連帯感を持ち続け、何らかの形で物心両面からの支援を続けたいと意を強くしたボランティアであった。

2011. 6. 9

田老地区の被災地
高台の学校は1階まで
浸水した。

東日本大震災見舞い関係

黒　澤　功　記

【4月25日（月）・26日（火）】

車　5時間半。
一関　姉　見舞い。地震前から体調悪かったが、地震で悪化。意識なし。
ホテル空なし。（ベリーノホテル一関　地震のため閉鎖）
厳美へのバイパスに面する建物、ガラス割れ塀が倒れ落下。
片付けているところとそのままの状態もあり。

【5月初め】

陸前高田　社会福祉協議会の盲人相手にボランティア活動をしている団体へ録音機材を個人で寄付。
一関一高の同級生　金　幸枝（学校の先生退職後）さんが活動している関係。

【5月27（金）・28日（土）】

車　5時間半。
姉死亡（24日）により毛越寺に葬儀。
毛越寺も瓦落下。　古い建物の壁、落下箇所あり。
世界遺産決定前

【6月26日（日）・27日（月）】

新幹線と一関から車
陸前高田市役所　教育委員会（仮庁舎の仮庁舎）訪問。
「寄付金があるけれども、受けてくれるか」という申し出をしていたが、進展がないため。
東京中野ライオンズクラブの寄付の件。
大船渡病院で　金　幸枝さんと面会、改めてお見舞、挨拶。ボランティア団体へ個人で10万円寄付。
庁舎も使用できず。職員だけで66人が死亡して、行政機能麻痺。その後、名古屋市役所から応援31人。

【8月3日（水）・4日（木）】

陸前高田第一中学校でTシャツ3,600枚寄贈。これは東京中野LCの奉仕活動中野ライオンズクラブから陸前高田の小・中学生1,700人　一人2枚。
（金銭は中野LCがだし、花泉LCと陸前高田LCに手伝ってもらう）
陸前高田小中学生27名が両親を失っている。
施設に入っている子。親類に預けられた子。その親類から施設へ入った子。転校した子あり。
校庭に仮設住宅

東海新聞　第16111号　平成23年(2011年)8月6日(土曜日)

児童生徒にTシャツ

ライオンズCから寄贈

陸前高田

東京中野ライオンズクラブ（中山典隆会長）と、岩手の花泉ライオンズクラブ（熊谷嘉高会長）、陸前高田ライオンズクラブ（熊谷又吉会長）は3クラブ共同で、陸前高田市の小中学生のために3600枚のTシャツを贈った。寄贈式は4日に高田一中（佐々木保伸校長、生徒272人）で行われた。

中野ライオンズクラブは、花泉出身の会員・黒澤功記さんを通じて岩手への支援を決定。震災で両親を失った小中学生が多く、自治体としての被害も大きかったことから陸前高田市を援助することになった。

同クラブは台湾の陽明山クラブと提携、また、会員の知人がドイツにいるため、台湾・ドイツ両国から資金提供の申し出があったという。同じく花泉クラブも香港の青馬クラブと提携しており、義援金が送られている。

寄贈されたTシャツを着る高田一中の生徒と3クラブ会員ら

3クラブはこれらのお金で陸前高田の子どもたちを支援することにし、その第1弾として、市内の小中学生に2枚ずつ行き渡るようTシャツを用意。デザインは中野クラブ監事の佐藤光男さんが行い、「奇跡の一本松」を盛り込んだ。

贈呈式には3クラブの会員と同校生徒会執行部員らが出席。生徒会長の高橋花歩さん（3年）が「高田市民を代表してお礼申し上げます」と謝辞を述べた。

中野クラブの鈴木照

第一中学校へ案内してくれた、陸前高田LCのメンバーの話

「私の家はこの学校の下にありましたが、あの瓦礫のあたりで家内は行方不明です。犬だけは二日後、この中学校の校庭で見つかりました。鎖が無かったので、家内がはずして逃げやすくしたのかもしれません。今は弟の家に厄介になっています。」

東日本大震災　宮城県本吉郡南三陸町志津川

大　野　利　朗

東日本大震災が発生して３カ月後の６月14日に、姉の病気と実家の震災見舞いを兼ねて家族３人で朝早く車で被災地に向かう。東北道、郡山に差し掛かると高速道路は波を打ち、段差があり、ガードレールが抜けたり曲がったりしていて、スピード規制をしていた。

所々で道路の補修工事が行われていて消防車、パトカー、自衛隊の救援車、被害地に届ける物資を満載したトラック、ボランティアとして行くのだろうか、それらしき人々を乗せた車が多く走り、非常事態の緊張感が漂うなか時々渋滞に遭う。

東北道から三陸道に入り若林ジャンクションから見た名取川流域の仙台平野、穀倉地帯の田圃一面に流木と瓦礫に覆われていたのには唖然とした。本来なら田植えも終わり青々とした、美しい田園風景なのに津波被害の広大さに驚いた。

登米インターから国道398号線、旧本吉海道に入り、志津川に入ると街が無い、家が無い、船、自動車、材木が折り重なり、瓦礫の山々、街の中を流れる川と国道沿いに津波が遡のぼり3km先まで被害が有った所に佇む。唯々津波の脅威に声が出なかったと言うのが一番先の印象でした。この悲惨な状況は言葉では言いつくせません。

南三陸町志津川五日町

74名の犠牲者がでた公立志津川病院

災害から３カ月過ぎているのに、所々更地になっているものの、手つかずの状態で道路だけは確保されていた。現場には人影なく時折、自衛隊の作業車、鉄くずを積んだダンプカーが砂

煙をあげて通っていた。瓦礫の撤去作業に邪魔に成りはしないかと、むやみに入り込むこともできず、少し広い公立志津川病院の脇に車を止める。

国鉄気仙沼線の駅舎も流され、線路とは思えない程に曲がりくねり瓦礫と化していた。公立志津川病院と南三陸町役場の大きな建物は形を留めているものの、窓枠が壊れ中は殆ど流失していた。鉄骨がむき出しになっているビルや、ビルそのものが倒壊していて、住宅は跡かたもなく粉々に砕け散っていた。109 人いたうち 74 人の犠牲者を出した公立志津川病院の近くで、瓦礫の中に被災で亡くなられた方々の霊気が漂い、持参した花を手向け、思わず誰に向かうでもなく合掌して来ました。

南三陸町は平成 17 年本吉郡志津川町と歌津町が合併し人口は約 1 万 8 千人の町です。6 月末現在の数字ですが、その内 4000 人が避難、514 人が死亡、約 660 人が行方不明、なんと住宅の全倒壊が 3880 棟に及んだと聞いて居ります。

南三陸町役場

志津川　汐見町
郵便局の内部

漁港に向かう道路は規制されていて、見に行く事が出来なかったが、志津川港に所属する船の 90% が流失もしくは倒壊したと言われています。

結婚式や中学の同窓会等で、志津川の観光ホテル観洋を利用する事が多く、馴染の風光明媚な志津川の街がこのように変貌するとは考えられませんでした。高台にあるホテル観洋の 5 階まで津波が押し寄せたと聞き、津波の怖さを改めて知らされました。

亡くなられた人々の冥福を祈り、被災した方々にお見舞い申し上げます。

平成 23 年 6 月 14 日